

第63回 日本病跡学会総会

●メインシンポジウム 健康生成と病跡学

ウィトゲンシュタインにおける 哲学的思索と宗教的思索の同時並行的な発展

加藤 敏*

I はじめに

“Der Welt ist alles, was der Fall ist”

ある1人の思想家について複数の多くの評伝が書かれる場合、作家などと同様、パーソナリティの上で偏りの著しい人物であることが多い。現代の哲学者についていえば、20世紀最大の哲学者の1人と目され、数奇な生涯を送ったウィトゲンシュタインはその最たる例である点については異論がないだろう。事実、彼については膨大な数の評伝、ないし論考が出されており、注目度において、群を抜いているように思う。

精神医学の側からは、ここ最近ウィトゲンシュタインをアスペルガー症候群と診る論考が増えている。そのなかには、彼の極めて独創的な思索がアスペルガー症候群の所産であるとする論考もだされている⁴⁾。この還元論的な考え方はいささか乱暴である。筆者は、ウィトゲンシュタインが生来、「きわめつきの高い知性ときわめつきの高い感性」の持ち主である点を考慮して、精神医学の見地から問題にする場合でも、彼の哲学的思索を真剣に理解しようとする姿勢が求められると考える。

筆者は以前から、彼の特異なパーソナリティだけでなく、鋭い哲学的な警句、また実に簡潔でいて、なるほどと思わずにいられない明晰さ

に魅力を感じていた。もちろん哲学に門外漢の筆者には、断片的に自我流にしか理解できていない。あわせて、宗教についての深い思索、また真摯な祈りの態度を終生持ち続けたことに関心をもっていた。

このたび、病跡学会で企画されたシンポジウム「健康生成と病跡学」において発表の機会を与えていただき、筆者の関心にしたがいウィトゲンシュタインの著作また日記、ノートなどの一部をなるべく原文にあたるよう努めながら読んでみた。緻密に考え抜かれた一貫した論理と方法に基づく独創性に富む特異な高い質と幅広さにあらためて驚かされた。そこでは、哲学思想においてはある点でラカンやデリダなどポストモダンの思想を先取りする斬新な視点を打ち出す思索が展開されるだけでなく、それと同時に並行的に、神、祈り、宗教に関し実に印象深い思索が展開されている。彼は若いときから亡くなるまで一貫して「哲学者の見地」と「宗教者の見地」の双方を堅持し、処女作でもあり代表的著作となった『論理哲学論考』²³⁾（以下「論考」）以後それぞれを方法論的に区別しながら誠実に徹底して思索を進めているように思われる。西欧において「人間が重大な思考をする場が神である」¹⁾と目された神の場をないがしろにした哲学的言説が支配的になった現在、このような複眼的な思索はきわめて稀有なことであるように思う。

「私は宗教的人間ではないが、宗教的観点からすべての問題を見ざるをえない」²²⁾ (p. 79) と述べたウィトゲンシュタインにあって、哲学者

Simultaneous development of philosophical thinking and religious thinking of Ludwig Wittgenstein

*小山富士見台病院, Satoshi Kato: Hospital Oyama Fujimidai

の見地と宗教者の見地がどのような関係にあるのか、哲学的思索において宗教がいかなる位置、また意義をもっているのか関心のあるところである。

このような問題意識のもとに、本論では、まず、①彼の宗教的思索だけでなく『論考』執筆の1つの重要な契機として挙げられるウィトゲンシュタインの戦争体験について振り返り、次いで②『論考』の大きな筋書きを筆者の関心に引きつけて素描し、『論考』で提起された問題意識が、一方で③後期ウィトゲンシュタインの代表作『哲学研究』の考察に発展し、他方で、④宗教的思索に発展していったことを跡付けた。最後に、⑤彼の風変わりなパーソナリティに目を向け、ウィトゲンシュタインの哲学的かつ宗教的思索に様々な光をあてたい。

ウィトゲンシュタインが著作で使用するドイツ語はきわめて簡潔で、大変重要なことを述べていて輝きがある。しかし、考え抜かれた末の凝縮したドイツ語のために、日本語だけでなく、英語、フランス語にもなかなか翻訳が難しい表現が少なくないように思う。

「世界はファル (Fall) であるものすべてである」
(Der Welt ist alles, was der Fall ist)

これは『論考』の冒頭に置かれた文である。含みが多く、抽象度がきわめて高い。邦訳は以下のように筆者の知る限り3つあり、それぞれ微妙に違う。

「世界は成立していることがらの全体である」
(藤本・坂井訳)²³⁾

「世界は成立していることがらの総体である」
(野矢訳)²³⁾

「世界は実情であることからのすべてである」
(奥訳)²³⁾

ドイツ語の Fall は多義性を帯び、別な国語への翻訳が難しい。医学では大変なじみの多い言葉で症例を指す。この用例によく示されるように、手触りのする身近な具体的な事象を指す言葉である。さしあたり世界は出来事、事件、事例、事象などの集合のすべてだと定義されてい

る。このように世界の規定において、Fall という言葉を鍵言葉に選んで使用していることからしても、世界を巨視的に唯一1つの文でもってとらえようとする大胆さとは裏腹に、それぞれの構成要素の個別性を大切に丁寧な、かつ記述しようとする誠実さを感じる。

筆者の理解が間違っていないなら、「世界はファル (Fall) であるものすべてである」とする世界の定義が意味するところを、臨床現場の症例に即していえば、①現在、世界各地で糖尿病や悪性腫瘍、エボラ熱、各種精神疾患などに罹患する症例すべて、また②過去において例えば明治時代、平安時代などの昔に病気を患った人すべて、さらに③将来、大量発生を予想される症例などが含まれる。地震といった自然災害についても同じように現在、過去、将来の事例が頭に浮かぶ。現在の世界に存在する国家や宗教、過去の国家や宗教も個別事例となるだろう。芸術作品や哲学思想も事例としてあがる。世界は夥しい数の個別事例から構成されるとする世界の定義は、きわめて包括的なもので、言われればなるほどと納得できるものである。現象学は、「人間は世界に住む、属す」世界内存在 (ハイデガー、メルロ＝ポンティ) であることを強調した。そこでは、世界は人の実存と密接につながる構成成分であると理解され、ウィトゲンシュタインのそれとはだいぶ違う。

そもそも、ウィトゲンシュタイン自身が、また彼の思索が稀有な Fall (事例) である。彼のパーソナリティに限っても、のちに述べるように自分を天才であるとはっきり認め、かつ自分が病的であることを自覚した二重の正しい内省を行っている。その意味では、事例ウィトゲンシュタインは現在の精神医学のカテゴリーではおさまりきらないスケールをもち、精神医学、そして病跡学の問題枠において試金石になるように思う。

なお本論を書くにあたり、ウィトゲンシュタインの哲学思想、宗教的態度を含めた生涯のあらましを知る上で、レイ・モンクによる大著『ウィトゲンシュタイン1, 2』²¹⁾を主に参考にした。また、『論考』の引用にあたっては、学生

時代に読み個人的に思い入れのある藤本・坂井訳『論考』に基本的に準じ、必要に応じ他の訳も参照し、一部改変した。引用頁はこの訳書のものである。

Ⅱ 第一次世界大戦における志願兵としての戦争体験

1. 志願兵になった背景

1914年6月オーストリア＝ハンガリー帝国の皇位継承者夫妻が銃撃されるというサラエボ事件を引き金に第一次世界大戦が勃発して、当事国であったオーストリアは8月6日ロシアに対して宣戦布告をした。ウイトゲンシュタインは早くもその翌日に自らの意志で入隊し、オーストリア＝ハンガリー軍の守備歩兵隊に配属された。25歳時の決断であった。

彼は1908年(19歳)にマンチェスター大学工学部の研究生となり、航空機の設計と製作の仕事に取り組んだ。その間、論理学研究への思いが強くなり、1912年(24歳)からケンブリッジに移り住み、学部学生、次いで大学院学生として、ラッセルやムーアの講義に出る。神経過敏で精神的に不安定になることが多く、強い不安に襲われることもしばしばだった。1913年、孤独の中での思索を求め、北海に面するノルウェーの都市ベルゲンの近くのショルデンという村に小屋を建て、論理学の書を完成させるべくそこに時々滞在した。8月下旬から親友のビンセントと2週間の旅行の計画を立てた矢先、ウイトゲンシュタインは、ヘルニアを患っていたため兵役の義務から免れていたにもかかわらず、オーストリア軍への志願兵の選択をしたのだった。この決断はかなり唐突である。親友のビンセントは「しかしとても悲しく悲劇的だ」と日記に記している²¹⁾(p.117)。ついでに述べておくと、『論考』の冒頭には若くして亡くなった「わが友ビンセントの思い出に捧げる」と記されている。

驚いたことに、身体的に決して恵まれているとはいえない彼は、兵士として「際立った果敢さと勇気」をみせ、最も危険な監視兵の役を志

願さえし、夜間の監視役の任務にも就いた。「企てた果敢な行為と冷静な勇壮さ」²¹⁾(p.161)を評価され、1918年2月1日には少尉に昇進した。

戦争参加の動機について、「戦争が自分を変えると願って戦争に参加した」と述べたという。もともと周囲の人との関係が苦手な彼にとり、兵士の毎日は集団生活の機会となったことは十分考えられることである。それ以上に、“死にたい”という希死念慮に襲われるウイトゲンシュタインにとり、現実の正真正銘の激しい死の恐怖に曝される戦争の最前線に身を置くことは、一種の同種療法的な仕方ですれまでの精神的不安や希死念慮に対し治療的に働くことが考えられる。

戦争に参加したことについてのちに彼は、「戦争が自分を救った」と振り返った。この言葉は、比喩ではなく率直な内省とみてよいだろう。なによりも、戦争参加の体験のおかげで、自殺を回避できたことを示しているように思われる。

ウイトゲンシュタインは9歳の頃から、“死にたい”という願望をもったという。兄弟姉妹8人のなか男兄弟が5人いる。そのうち長兄ハンスは、26歳で船から理由もなく自分から転落して亡くなった(1902年)。3番目の兄ルドルフは服毒自殺をした(1903年)。2番目の兄クルトは軍での名誉のためけん銃で自分の頭を撃ち抜いた(1918年)。自殺を免れたのは、ウイトゲンシュタインと2歳上の兄パウルだけである。パウルはピアニストで、第一次世界大戦に兵士として参加し、右腕を失った。それにもかかわらず、左手だけで演奏活動を続け、世界的な評価を受けている。兄弟がそろって死と隣り合わせの気質(パーソナリティ)を分かちもっていたことは間違いない。彼に迫る執拗な死の欲動は自ら志願兵となり戦場に赴くことで、充足され、自殺を免れたことも推測される。

いずれにせよ、彼が宣戦布告の直後、即座に志願兵になった背景を考える際、自殺願望は1つの要因として挙げられるだろう。のちの小学校教師時代の教師仲間に語ったところによると、従軍の理由は戦争に「自殺の1つの方法を

見出したからである」という¹⁶⁾。しかし、いざ戦場に赴いてみると、現実の死の恐怖に圧倒されることになる。そして、神への祈りをする宗教的境地が拓かれてくる。克明に記された従軍時の日記を参照すると、戦場での毎日が臨場感をもって伝わってくる。いくつか抜粋する。

徴兵検査を受けクラクフの第2要塞砲兵連隊に配属された初日の日記には、

「はたして僕は今後仕事ができるのだろうか？来るべき生活を思うとわくわくする！」³⁰⁾ (1914年8月9日, p.19)

と兵士の生活への新鮮な期待が熱情的に綴られている。

実際に兵役に就いてみて、一緒に行動を共にする兵士仲間の悪意、愚かしさに驚き、著しい嫌悪感を抱く。

「乗務員はならずものばかりだ！ 信じがたい粗野、暗愚、悪意！ つまり、共通の重大事のために、最もやっかいな仕事の強制となってしまう」³⁰⁾ (1914年9月15日, p.13)

「もういちどくりかえす——これらの人間たちの暗愚、無礼、悪意は限界を知らない。一つ一つの仕事が苦痛になる」(1914年9月16日, p.14)

「くりかえすが——人間の悪意に対して自ら抗わないことは、限りなく困難だ。というのも、人間の悪意は、そのつど、人に傷を与えるのだから」³⁰⁾ (1914年9月20日, p.26)

何ひとつ不自由のない裕福な名家で育ち、知的に卓越したワイトゲンシュタインにとり、凡庸な兵士との共同生活は耐え難いもので、普通の人間がどんなものかを知る機会になったことも考えられる。これももとを正せば、彼自身が敢えて望んだ社会体験だったかもしれない。

「夜中の1時ころ突然起こされる。中尉が呼びに来て、直ちに探照灯のところに行くよう命じる。僕はほとんど裸でブリッジに走った。凍てつく空気が。雨。僕は死ぬだろうと確信した。……(中略)……僕は恐ろしく昂奮し、声を出して呻いた。僕

は戦争の恐怖を感じた。今(晩)、もう僕は恐怖を再び乗り越えた。もし僕が現在の考えを変えることがないとすれば、僕は今後生命を全力で保とうとするだろう」³⁰⁾ (1914年8月18日, p.15)

このくだりには、戦争に対する死の恐怖が正直に語られている。

2. 宗教的目覚め

「昨日、トルストイによる福音書への注解を読み始めた。素晴らしい作品だ。しかし、僕がそこに期待したほどのものではない」³⁰⁾ (1914年9月2日, p.19)

「[戦況に関する]知らせはますます悪くなる。……(中略)……僕は心の中で何度も自分に向かってトルストイの言葉を繰り返し言い聞かせている。人間は肉において無力だが、精神を通じて自由だ。どうか僕の中に精神がありますように！」

「午後、少尉が近辺で銃声を聞いた。僕は昂奮した。恐らく非常召集をかけられるだろう。銃撃戦になったら僕はどのように振舞うのだろうか？僕は射殺されることを恐れはしないだろうが、自らの義務を果たすことができないことを恐れる。神が僕に力を与えてくれますように！アーメン。アーメン」³⁰⁾ (邦訳では「精神」Geistは「霊」と訳されている) (1914年9月12日, p.21)

「穏やかな夜。遠くで絶え間ないカノンの轟音。依然としてタルノジエクにいる。この近くで明らかに途方もない戦闘が行なわれている。……(中略)……命令—総員、武装して甲板に出よ。神は僕とともに」³⁰⁾ (1914年10月9日, p.34)

このように日記には、戦場でトルストイを通し福音書の教えを精神の糧としていたこと、そして神への祈りの言葉が随所に書き記されている。銃撃戦になったとき、果して敵を討てるのかどうかという悩ましい問題が彼に持ち上がったことも注目に値する。

戦争の最前線にいたワイトゲンシュタインは、自らの死の怖れだけでなく、他人を殺すという怖れにも直面した。こうした複合的な限界状況(ヤスパース)において、神が支えとして現実味を帯びて浮上してきたことが窺われる。

戦争の月日が経つうちに、戦争の恐怖が多少

とも乗り越えられ、自ら生の危機に直面することを意識的に望むといった願いが表明されることが多くなっているようである。その際、神の助けへの祈りもなされている。

「8日もしたら、われわれは砲撃陣地へ行く。どうか、困難な課題の中で自分の生を危険にさらす機会が僕に与えられますように」³⁰⁾ (1916年4月16日, p.109)

「神が僕をより善いものにするように！ そうすれば僕も快活になるだろう。今日はもう砲撃陣地だ。神が僕を助けますように」³⁰⁾ (1916年4月20日, p.110)

あるときには、神は、ワイトゲンシュタインにとり死を怖れることなく死を受容できることを助けてくれる存在として要請されていることがわかる。

他面で、「生きたい」という言葉も綴られている。同時にその執着は罪であるとする考えが綴られている。

「昨日、砲撃を受けた。弱気になった！ 僕は死への不安を感じた！ 生きたい！ そして、ひとたび生に執着するなら、それを放棄することも容易ではない、それこそ「罪」であり、非理性的な生であり、生についての間違った理解である」³⁰⁾ (1916年7月29日, p.121)

なお、日記には自慰をしたという性生活のことまで赤裸々に書かれている。そのためにこそ、彼の名誉を大事にするため、弟子たちは長い間「戦争日記」を公開することを躊躇っていたと思われる。刊行にあたっては「秘密の日記」と題されたゆえんであろう。

「今日は長時間憂鬱と戦った後、時間がたってから再び自慰し、上記の文章を書いた」³⁰⁾ (10月12日, p.37)

「穏やかな夜、今は10日に一度くらいの割合で自慰している。体を動かす仕事は少ししかしていないが、その代わり精神的な仕事を多くした」³⁰⁾ (1914年9月15日, p.39)

「僕は再び自慰をした。(半ば夢のなかで)」³⁰⁾
(1914年10月19日, p.41)

自慰は彼にとり神を前にして罪悪感を引き起こす。これが直接の誘引となって抑うつ的になってしまう。

戦場にいるワイトゲンシュタインにあって、死の欲動と生(性)の欲動の双方が目まぐるしく交錯していることがわかる。この種の揺れ動きが生涯続くことになる。

総じて「死だけが人生にその意味を与える」²¹⁾ (p.148) と考えるワイトゲンシュタインにとり、戦争の最前線にいることは、彼にとり真正面から死をみつめる、生きた思考実験の機会になったことも考えられる。ハイデガーが人間存在を特徴づけた「死への存在」の体勢をワイトゲンシュタインは自ら戦争の場で実践し、人間について思索を進めたといえる。

3. 「論考」草稿の執筆

志願兵になった背景には、緊張感に満ちた「死への存在」に自分を追い込み、自己に向きあい思索するという目論み¹⁶⁾もあったことが推測される。筆者には、これが主たる要因であるように思える。実際、日記と草稿を照らし合わせると、戦場にいて空いた時間、彼は哲学の思索に集中し、ノートに考察を書いた。こうして『論考』のもとになる『草稿』²⁴⁾ができあがる。戦争参加は哲学的思索の手がかりを与えただけでなく、宗教的な目覚めをもたらし、高い質の自己確信を導いたことが考えられる。このようにして「戦争が彼を救った」。敢えていうなら、前線での戦争体験が、画期的な「論考」の培地となった。

事実、兵士になっておよそ2週間後から、早くも『論考』の骨組みとなる高度な本格的な思索を覚書の形で綴る作業が始まっていることがわかる。

「論理は自分だけで、自分だけを配慮しなければならぬ」(『論考』五・四七三をみよ) (1914年8月22日)²⁴⁾ (p.127)

この文を皮切りに当初は、彼が主眼とする「論理」について厳密な考察がなされる。かなり長文に及ぶ思索もなされている。次の思索はその10日余りあとに書かれている。

「我々が論理の中で誤ることは或る意味で不可能でなければならない。次のことが幾分か既に表現している。即ち、論理は自分だけで、自分だけを配慮しなければならない。これは非常に深い、重要な認識である」『論考』五・四七三に対応²⁴⁾ (1914年9月2日, p.127)。

日記に「仕事がうまく進んだ」「仕事が進まず落ち込んだ」といったことが記されている。『論考』の草稿にあたる思索の日付と戦場日記の日付をみると、「仕事」とはまさに哲学の思索を指していることがわかる。「はたして僕は今後仕事ができるのだろうか？」という先に引用した戦争に志願した翌日の彼の高揚した言葉で述べられている「仕事」も、哲学的思索のことを指していると思われる。その点からしても、彼の場合、兵役は国家のためというより、個人の実存的な関心に動機付けられていることがわかる。

ケンブリッジにいたとき、彼はノルウェーにある厳しい大自然の只中の村を思索の場を選んだ。戦争の最前線は、これに類比される彼の思索に適した場所として考えられた可能性があるのである。

例えば1914年10月17日には、仕事がはかどった喜びが書かれている。

「昨日は非常にたくさん仕事をした。学問上の結び目がどんどん集まってきたが、解決は見出すことはなかった。われわれは晩のうちにバラヌフにとどまり、今、午後6時ころだがシュチュチンに向け航行する」²⁴⁾ (p.39)

この日の哲学の思索は以下のようなことが書かれている。

「完全に一般的な命題が存在するならば、そのよ

うな命題は、「論理定項」の実験的な構成と思われることであろう(！)

ところで、世界を完全に一般的な命題に記述することは一体可能なのか(あらゆる側面からこの命題が示されてくる)。

然り。世界を完全に一般的な命題によって、それ故に何らかの名やその他の指示記号を全く使用せずに、完全に記述可能であろう」『論考』五・五二六に対応²⁴⁾ (p.48)。

世界をいかに論理によって把握し、また言葉で記述できるのかという問いは、『論考』で大きな位置を占める。そうした大上段に構えた問題の立て方が、この覚書にあるように、戦場で練り上げられたことは意味深い。ワイトゲンシュタインは1918年11月3日イタリア軍の捕虜になり、モンテ・カッシーノで約10ヵ月捕虜生活を送る。その間、ラッセルとフレーゲに手紙を送り、『論考』の原稿を送っているという。つまり、戦争に従軍している間に、『論考』は完成をみるに至っている。これは驚きである。実際の刊行までには紆余曲折を経るのだが、一流の哲学の書で、兵士として戦争に参加し、その間に書かれ完成をみたものは他に類をみないのではないか。

Ⅲ 『論考』の大きな筋立て： 哲学的見地から審美的・宗教的見地へ

1. 計6節の連なり方

『論考』²³⁾の大きな筋立てを筆者の個人的な読みであらまし述べ、宗教的次元がどのように位置づけているのか具体的にみたい。この著作の大きな筋立ては、非常に論理的で、順々に段階を追って精緻な議論が進められる。形式的にはきわめて簡潔である。それぞれの文章には彼の思索が凝縮してつめこまれており、理解は容易ではない。

計6節からなり、それぞれの節に番号がふられて、各節の冒頭に、主語―述語がはっきりした鍵となる文が配置されている。参考に列挙する。

第1節「世界はファル(Fall)であるもの

すべてである」

(Der Welt ist alles, was der Fall ist)

第2節「ファルであるもの、すなわち事実とは、諸事態の存立である」(Was der Fall ist, die Tatsache ist das Bestehen von Sachverhalten)

第3節「事実の論理像が思考である」(Das logisch Bild der Tatsache ist der Gedanke)

第4節「思考は意味をもつ命題である」(Der Gedanke ist sinnvolle Satz)

第5節「命題は要素命題の真理関数である」(Der Satz ist eine Wahrheitsfunktion der Ekementarsätze)

第6節「真理関数の一般的形式は $[\bar{p}, \bar{\xi}, N(\bar{\xi})]$ である」

容易にわかるように、これらの鍵となる文の連なり方には特徴がある。1節「世界→ファル(Fall)」, 2節「ファル(事実)→事態」, 3節「事実→思考」, 4節「思考→命題」, 5節「命題→真理関数」, 6節「真理関数→……」と続く。つまり、主語を規定する述語が順番に次に主語になるといった仕方で連なっている。このように議論が順序だてて段階的かつ重層的に進められていく構成からしても、思索が順を追って深まっていく様子が窺われるだろう。

2. 世界の定義：「世界はファル(Fall)であるものすべてである」

冒頭の記事「世界はファル(Fall)であるものすべてである」は、ウイトゲンシュタインによる世界の定義といえるものであるように思う。このような大胆な包括的な規定をした哲学者はこれまでいなかったのではないだろうか？ 世界を論理的にどのように把握できるのかが、最大の眼目となっている。『論考』はこの定義を精緻化する試みということもできる。

第2節で1節の冒頭の記事「世界はファル(Fall)であるものすべてである」と重なる世界についての規定がなされる。

「存立する事態の総計(Gesamtheit)が世界である」(二・〇四)

ここでは、次のような補足がなされる。

「事態の存立・非存立が現実(Wirklichkeit)である」(事態の存立を肯定的事象、事態の非存立を否定的事象とも称することにしよう)(二・〇六)
「総ての現実が世界である」(二・〇六三)

これらの論述からすると、世界は実際には成り立っていない事態を含むものとして考えられている。実際に存在していない否定的事態もファル(Fall)と考えられているとすると、世界の外延が非常に広いことがわかる。なお、事態(Sachverhalt)は最終的に言語によって記述されるものとして構想されている。

第4節で言語について主題的に論じられる。言語の驚くべき機能についての重要な事項が、次のように述べられる。

「日常言語は人間という有機体の一部であり、そしてこれに劣らず複雑である」

「各々の語がいかんにかして何を意味するかについて観念を持たずに、そして何を意味するかについての観念を少しも持たずに各々の意義をも表現しうる言語を構成する能力を人間は有している」(四・〇〇二)

人間が「各々の語が何を意味するかについて観念を持たずに、言語を構成する能力」をもっているという認識は、思考についてもあてはまり、言語こそ思考を駆動するという見解を暗に含む。したがって、この言語理解は、「われ考える、ゆえに我あり」(デカルト)の定式に基礎をもつ近代哲学に対する異議申し立てにはほかならない。実際、人間に備わる言語に関する論述にすぐ引き続き、「哲学者達の大抵の間や命題は、我々が我々の言語の論理を理解していないことに起因している」と明言する(四・〇〇三)。言語の固有なあり方に根ざす伝統的な哲学に対するこの批判は、まさにのちに検討する『哲学探究』の眼目となるもので、『論考』で既に垣間見

られる。

「命題の総計が言語である」

これは、第4節の冒頭に続く文である。実のところ「命題」はドイツ語では Satz で、「文」という意味が普通である。ウイトゲンシュタインが Satz の語を使用する際、日常語の「文」の意味も込めていることは間違いない。だとすると、ウイトゲンシュタインは「文の総計が言語である」と論じていると解したほうがよいだろう。さらに彼は、命題 (Satz) には、つまり文には、正しいものもあれば、偽りの文もあると慎重に留保を付けている。だとすると、「文の総計が言語である」という見解には、言語は真偽いずれも含んだ開かれた集合であるという認識が込められているといえる。

Satz について次のような規定がなされている。

「文は語の寄せ集めではない——(音楽の主題が寄せ集めではないように)。文は分節化されている」(三・一四一—部試訳)

そこでいわんとしているのは、文は言葉が一定の順番で配置される形で構成されている点にこそ特徴があるということである。この見解は、文章がシニフィアンの連なりであるという構造論的な理解に通じる射程をもつと筆者は考える。

3. 世界の記述

この第4節で初めて、世界の記述について踏み込んだ議論がなされる。有名な写像理論である。命題はそれが表す事態、ないし事実、ひいては世界をいかに描出、描写できるのかが問題にされる。

「レコード版、音楽の思想、楽譜、音波、これらは相互に、言語と世界の間存する写像の内的な関係をなしている」(四・〇一四) という語り方にみるように、言語によって世界を写像するという議論は、音楽の例からして、写真に撮

るような単純なものではないことは明らかである。

そこでは、世界の完全な記述の可能性、また条件について議論が進められる。

「すべての命題の真なる要素命題の陳述が世界に完全に記述する。すべての要素命題を陳述し、これに加えてそれらのいずれかが真でありいずれが偽であるか陳述すれば、世界は完全に記述される」(四・二六)

要素命題は、世界を把握する上で最小の単位の文を指すものと理解してよいだろう。世界の記述は正しい要素的な文によってなされる。その際、ウイトゲンシュタインは、偽りである要素的な文にも配慮する必要があることも説く。先に、実際に存在していない否定的事態も、世界を構成するファル (Fall) と考えられていることに言及した。この否定的な事態は、要素命題が偽りの場合に対応する。世界の外延に否定的事態が含まれている限りでは、世界の記述は、正しい要素命題に加え、偽りの要素命題によって完全な仕方でなされるという見解が導かれている点は興味深い。

この企ては、議論としてわかるが、世界の記述にふさわしい真の要素命題が提示されていないことからして、その実現性は不問に付されているように思える。冒頭でウイトゲンシュタインには、“世界を、ありとあらゆる事例、事象から構成されるとみる姿勢がある”ことを指摘した。ここにきて、「世界」というとき、実際には存在しないが思考上は想定できる偽りの世界、つまり「可能世界」も含む姿勢もあることが付帯的に見て取れることを付言しておきたい。

4. 語りえないものの主題化

そのような議論のなか、哲学の思索を突き詰めた末に浮上する思考不可能なもの (Undenkbare), 語りえないもの (Unsagbare) についての論述が少しずつ姿をみせる。『論考』において、言語で世界を記述することに力を入れ、次いで要素命題を論理的に考察する作業を

進める途上で、言語の限界点が浮上してきて、こちらが結果として主題化されてくるのである。そこは『論考』の思索における重要な転換点である。筆者の問題意識からすれば、哲学的見地を突き詰める過程で宗教的見地の必要性が導かれてくる。

「哲学は思考可能なものを限界づけ、これにより思考不可能なものを限界づけなければならない。哲学は思考不可能なものを、内側から思考可能なものによって、限界づけなければならない」(四・一一四)

「哲学は語りうることを明晰に表現することによって、語りえないものを示唆するにいたる」(四・一一五)

第5節に入り、真理関数の術語で要素命題について綿密な論理的考察がなされた後、思索を突き詰めた先端の点で繰り出されると推察される印象的な断章が登場する。

「私の言語の限界が私の世界の限界である」(五・六)

「論理は世界を満たす。世界の限界は論理の限界である」(五・六一)

「主体は世界に属さない。それは世界の限界なのだ」(五・六三八)

「言語の限界」「世界の限界」「論理の限界」はいずれも、言葉で思索することが限界に陥った事態を記す言葉である。

さらに最後の第6節で、命題についての論理的考察が推し進められるなか、「神」「世界の外」「神秘的なもの」などの言葉が繰り出される。

「世界の意味は世界の外に求められなければならない。世界の中のすべてはあるがままにあり、生起するがままに生起する。世界のうちにいかなる価値も存在せず、またたとえ存在したところで、その価値にはいかなる価値も存在しない」(六・四一)

「世界がいかにあるか、ということは、より高次の存在にとっては、全くどうでもよいことだ。神は世界の中には顕れない」(六・四三二)

この言葉から推し量ると、「神は世界の外に顕れる」ということになる。

「世界がいかにあるかが神秘ではない。世界があるということが神秘的なのだ」(六・四四)

「永遠の相のもとに世界を直観するとは、世界を——かざられた——全体として直観することにほかならない。

かざられた世界としての世界にいただく感情、これこそ神秘的なものだ」(六・四五)

「言い表せぬものが存在することは確かである。それはおのずと現われ出る (zeigt sich)。それは神秘的なものである」(六・五二二)

「世界がいかにあるかではなく、世界があるというそのことで神秘である」という言葉は、世界があるということは奇跡であると彼が確信した神秘的体験に裏付けられていることが考えられる。

同様に、「言い表しえないものが存在し、それはおのずと現われ出る」という言葉は、彼自身の神秘体験に裏付けられていることが考えられる。厳密にみると、「言い表せぬものが存在することは確かである。それはおのずと現われ出る。それは神秘的なものである」は2つの分節からなると捉えるべきである。「言い表せぬものが存在することは確かである」は哲学的思索を進める過程で導かれた判断と考えられる。「それは自ずと現われ出る。それは神秘的なものである」は、彼の戦場での神秘体験に基づく確信と考えられる。前者は哲学的見地に立脚した言葉であり、後者は審美的・宗教的見地に立脚した言葉である。このように『論考』の最終の第6節になると、それまではっきり表明されていなかった審美的・宗教的見地が躍り出てきて、哲学的見地と宗教的見地が合わさった断章が登場する。

いままたような神、神秘的なものといった宗教的な言説は、彼が戦場にいた1916年頃の『草稿』に既に書かれている。一例を挙げる。

「神と生の目的に関して私は何をしるか」

「生の意義、即ち世界の意義をわれわれは神と名

づける」

「祈りは世界の意味についての思想である」(1916年6月11日)³⁰⁾ (p.253)。

『論考』を締めくくる場面で、ウィトゲンシュタインは哲学の方法についてあらためて踏み込んで述べる。

「哲学の正しい方法とは本来語られるもの以外にも語らぬこと」

「かれは哲学を学んでいる気がしないであろうが、これこそが唯一の厳正な方法であると思われる」(六・五三)

「読者はこの書物を取り越えねばならない。そのときかれは、世界を正しくみるのだ」(六・五四)

これらの断章は、哲学的見地と審美的・宗教的見地を峻別し、哲学の方法論的限界を自覚することによって、初めて人は世界を正しくみることができるとを説いたものといえる。

「語り得ないものについては、人は沈黙しなければならない」(七)という文字どおりこの書を締めくくる有名な言葉は、「語り得ないもの」「思考不可能なもの」を大切にす、ひいては審美的・宗教的見地の重要性を説いた倫理の定式にはほかならない。その意味で、『論考』は新たな「生の形式」(Lebensform)を説いた倫理の書なのである。

彼自身が『論考』を著した後に始めた小学校教師の日々は、神への祈りから授業を始めたという逸話からも想像されるように、宗教的見地に根ざした新たな生の形式を実践しようとする企てとみなされる。そうみると「読者はこの書物を取り越えねばならない。そのときかれは、世界を正しくみるのだ」という言葉は、自身に向けて発せられたものともとれる。

そうした新たな生の形式を追求しようとする背景には、科学的な考え方が支配的になっている時代精神を糾弾する態度も控えている。

「現代の世界観はすべて、その根底において、いわゆる自然法則を自然現象の説明とする誤りを犯している」(六・三七一)

「科学上のありとあらゆる問題に解決が与えられたとしてもなお、人生の問題はいささかも片付けられていないことをわれわれは感じている(六・五三)

科学は「語りえないこと」を括弧に入れている。ウィトゲンシュタインは、科学的な見方において疎んじられる審美的・宗教的見地の重要性を説くのである。

5. ラカンの精神分析理論に通じる論点

筆者はこれまで『論考』において哲学的見地から審美的・宗教的見地へと考察が重心移動をしていることを論じた。この審美的・宗教的見地には、ラカンの精神分析が説く主体理解と重要な部分があることも論じておかなければならない。

謎めいた断章「主体は世界に属さない。それは世界の限界なのだ」で述べられているのは、言語の限界点にある主体にはほかならない。それは〈現実的なもの〉(le réel)を核とする無意識の主体を指し示していると理解しやすい。「私の言語の限界が私の世界の限界である」(五・六)という言葉がウィトゲンシュタインが主張する独我論の立場から述べられていることを勘案すると、言語ではもはや言い表せない限界点こそ「私の世界の限界」で、その先端的な点こそ(無意識の)主体の場所である。実際、彼は主体が点になってしまうことも明言している。

「ここにおいて独我論を徹底すれば、……(中略)……独我論の自我は、延長をもたぬ点へと萎縮し、残るものはそれに対応する実在のみとなる」(五・六二四)

「語り得ないもの」「思考不可能なもの」は科学的見地から落ちこぼれる「私の言語の限界」「私の世界の限界」にはほかならない。それはラカンが精神分析理論の軸にすえる〈現実的なもの〉にあたる。その意味では、ウィトゲンシュタインは思索の末に〈現実的なもの〉につきあつたということが出来る。

後期ラカンは、「神は外一在 (Ex-sistance) の最たるものである」と述べる^{10,17)}。この考え方は、「神は世界の外部に位置する」というウィトゲンシュタインの見解と重なるところがある。ウィトゲンシュタインのいう神は「語り得ないもの」「思考不可能なもの」である以上、その存在の様態は〈現実的なもの〉である。この点はラカンが述べる神と同じである。

「示されうることは、語られることができない」(Was gezeigt werden kann, kann nicht gesagt werden) (四・一二二) という断章は、ウィトゲンシュタインが「語る」行為と「示す」行為を明確に分けていることを示す。この区別は評価に値する。人は「語る」ことができないものについて、「示す」ことしかできない。すなわち、語ることを推し進めていくと、語りえないもの、つまり〈現実的なもの〉に突き当たり、これは示すことしかできない。神が「語り得ぬもの」「思考不可能なもの」である以上、人は神について語ることはできない。人は神について「示す」ことしかできない。あるいは、神は「自ら示す」(「おのずと現われ出る」(sich zeigen))。

神が顕れるといった神秘的体験は別にして、分析主体 (analysant) による精神分析の過程についても、①「語る」段階から、②「示す」しかできない段階に入っていく道筋があるのではないか。このことはラカンにもあてはまり、晩年のセミナーでは、例えば作家ジェームズ・ジョイスを論じた『サントーム』¹⁸⁾において、ポロメオの輪やトーラスを駆使して講義を続けたのは、「示す」ことしかできない言語の限界点で一貫して考察することを自らの方法論にしたからではないだろうか。

IV 後期における「言語シュピール」

1. 『哲学探究』におけるフロイトーラカンの視点

ウィトゲンシュタインは『論考』を著してから、小学校教師、次いで、建築設計の仕事に携わるなどして過ごし、一時期哲学から離れた。1938年にケンブリッジに戻って来て、再び哲学

の思索に精を出し、翌年(50歳)に『論考』を博士論文にしてケンブリッジの哲学教授に選ばれる。彼はケンブリッジに戻る前の1936年の春再びノルウェーの小屋に引きこもり、第2の主著となる『哲学探究』²⁵⁾の執筆に既にとりかかっている。教授に就任してからも、この作業は続け1945年には第1部はほぼ完成をみた。しかし、満足がいかないところが出てきて出版の企画をとりやめ、第2部の執筆を始め、亡くなる2年前にあたる1949年まで続く。第2部の完成をみないまま、本人の希望どおり死後に出版されることになった。

この著作も『論考』と同様、番号がふられて考察が進められる。第1部は実に計692の断章からなる。しかし『論考』に比べ文章は重厚で長いものが多く、様々な局面から議論が仔細になされる。あるときは自問し、あるときは想像上の人物との対話形式で、思考実験を意図的に行って問題を徹底的に突き詰める。『論考』と同様、巧みな譬えを出しながら極めて斬新な考えが出される。そのなよりの鍵言葉が「言語シュピール」(Sprachspiel)である。

邦訳では「言語ゲーム」、英訳でも“language-game”であるが、ドイツ語のSpielは多義的でゲームだけでなく、遊び、戯れ、賭け事、演技といった意味をもつ。ウィトゲンシュタインはそうした豊かな含みをもたせてSprachspielの術語を使用していることは間違いない。仏語訳のjeux de langageが最も適切な訳語であるように思われる。Sprachspielを「言語ゲーム」とだけ解したのではせっかくの貴重な思索が単純化されて理解されてしまうことが憂慮される。そこで、さしあたり本論ではSpielはそのままにして、Sprachspielは「言語シュピール」として論じたい。

人は何かを語を連ねて発話をする際、それがいかなる意味をもつのか厳密に知らずに語っていることが大半である。しかも発せられた言葉は、当人が言おうとした意味からそれ、当人自身知らない重層的な意味作用をしている。そこには言語の自律的な活動も想定される。「言語シュピール」という術語は、このように多義

性と自律性をもった言葉の動きの総体を指しているように筆者には思える。

このとらえ方は、ラカンの精神分析理論に引き付けた Sprachspiel の理解となっており、専門家から厳しい批判があることが予想される。しかし興味深いことに、ウイトゲンシュタインは、1930年から1933年の間に行った一連の講義「美学、心理学および宗教的信念についての会話」のなかで、フロイトの『夢解釈』⁵⁾を高く評価し、しばしば重要な言及をしている。講義「フロイトについての会話」²⁶⁾では、「夢の中での象徴化。夢言語という考え」(p. 211)「夢の中のイメージには、言語の記号とある種の類似性をもつような何かが存在している」(p. 214)など、夢を言語とみる視点を打ち出している。さらに「われわれがある夢をみた人の行なった一種のゲーム (Spiel) とみなそうとしていた、としよう」(p. 221)とさえ語った。この見解は夢を言語シュピールの所産とみなす構えを示す。

「美学についての講義」では、フロイトの「機知——その無意識との関係」の論文を参照し、次のように高い評価をする。

「フロイトは、しゃれを变形し、しゃれの一端から別の一端へ移る観念連鎖の表現とわれわれが認めるような別の形にしてしまう。正しい全く新しい説明の叙述である」²⁷⁾

ここで念頭に置かれているのは、ハイネの作品の中の人物が裕福な男爵とのつてを自慢し、familiär (家族の) と millionär (百万長者) が合成された機知に富む言葉 famillionär (百万家族の) を思わず発し、周りの人々が笑うという例を挙げたフロイトの分析だと想像される⁶⁾。ウイトゲンシュタインからすれば、famillionär (百万家族の) の言葉が創出される過程も言語シュピールの所産ということになる。

こうした理解は、フロイトの精神分析学を言語の動きに焦点を当てて脱構築している点で、ラカンの構造論的精神分析の方法を先取りしている側面があることがわかる。

ラカンは『セミネール』において、無意識の活動を指し示す「シニフィアンの戯れ」(jeu des sinifiants) という言葉を何度も発している。容易にわかるように、シニフィアンの戯れ (jeu des sinifiants) と言語シュピールには近縁なところがある。共に言葉そのものが動因ないし主体となった自律的な遊び、活動も内に含む。ウイトゲンシュタインの立場はともかくとして、我々は言語シュピールに無意識の主体を想定できるのではないか。

「言語シュピール」は、こうした無意識の主体の言語活動も包摂する射程をもった豊かな術語であることを指摘したい。フロイトの「弟子」「後継者」(1941年)であると自認するウイトゲンシュタインは、『論考』以後確かにフロイトの理論を独自の手法で継承し、発展させる形で『哲学探究』を著したと読める側面をもつ。次の考察などその例となるのではないか。

「〈シュピール (Spiel)〉という概念は、輪郭のぼやけた概念だということができる——「だが、ぼやけた概念など、そもそも概念なのか」—— 概念など、そもそも人間の映像なのか。そのうえ、ピンボケの映像をはっきりした映像でおきかえられることがいつも都合のいいことなのか。ピンボケのものこそ、まさにしばしばわれわれの必要とするものではないのか」²⁸⁾ (p. 73)。「ピンボケ」という表現は、透明性を欠いているということであり、人が話す言葉の多義性をふまえてなされたものといえる。日常の言語も「ピンボケ」であることが普通ではないか。言語シュピールは、なによりも「ピンボケ」を特徴とする日常の言語表現に焦点を当てる。

「誰かが次のように言ったとせよ。たとえばある書物の [中の] われわれによく知られている言葉は、いずれもわれわれの精神の中に、すでにそれ自体で一つの雰囲気、ほのかに暗示される諸適用の《罫》をもっている、と。…… (中略) ……ともかくこの仮定をまじめに考えてみよう！——そのとき志向ということを説明できないことが示されるのだ」²⁹⁾ (p. 360)

言葉の「暈」という表現は、「ピンボケ」と同系列のものである。精神分析の見地に引き付けると、「暈」も「ピンボケ」も、無意識の主体の場における言語の不透明な意味作用を指し示した比喩的表現といえる。

さらに彼は続けて、人々の相互の言葉でのコミュニケーションが、不透明な形でなされていることを述べる。

「すなわち、もしそうであって（言葉には「暈」があるということ、括弧内著者補足）、ある語の適用の可能性が、話し、あるいは聞く際に、半音状態でわれわれの念頭に浮かぶのであれば——もしそうであれば、それはまさにわれわれに対して妥当する。しかるに、われわれは、他人もかかる経験をしているかどうか知らずに、他人と意思疎通している」²⁵⁾ (p. 360)

他人との意思疎通が「暈」、**「ピンボケ」**の言語使用によってなされるというあり方も、言語シュピールの1つの特徴として考えられると思われる。確かに人々の日常の会話において、言葉の意味は非常に曖昧であるものが多いのではないか。

このような論述から察せられるように、『哲学探究』では、日常生活で人が発している言葉の様々なあり方を明るみに出すことが課題となる。

2. 〈原現象〉としての言語シュピール

『論考』で世界の記述、論理の解明に力を注いだウイトゲンシュタインは、後期に入り、世界を記述する作業の媒体と目された言語を考察の中心に据え、言語の記述に力を注ぐ。これは卓越した特筆すべき進展である。前期ウイトゲンシュタインと後期ウイトゲンシュタインの間には大きな対立、変遷があるとみる見解が支配的なようだが、筆者は基本的には連続性があり、思索の必然的な展開のなせる業とみたい。

哲学の課題は次のように定式化される。

「哲学はいかなるしかたにせよ、言語の実際の使用に抵触してはならない。それゆえ哲学は、最終的には言葉の使用を記述できるだけである」

「なぜなら、哲学はそれ（日常言語）を基礎づけることはできない」²⁵⁾ (p. 104 括弧内筆者補足)

ここでいわれている課題は、彼自身が自分に課した哲学の課題にほかならない。

まずもって彼は、「言語シュピール」(Sprachspiel)こそ人間にとって根本的な事象であることを強調する。

「言語シュピールをわれわれの体験によって説明することが問題なのではなく、言語シュピールを確認することが問題なのである」²⁵⁾ (p. 332)

「われわれの錯誤は、事実を〈原現象〉とみるべきところで、説明を求めるといふこと。すなわち、かかる言語シュピールが行なわれている、というべきである」²⁵⁾ (p. 332)。

「言語シュピールを始源的なもののみよ」²⁵⁾ (p. 332)

要するに「言語シュピール」(Sprachspiel)は、それ以上さかのほれない「原現象」(Urphänomene)なのである。人は言語シュピールに対し「説明」することに務めるのではなく、記述することを要請されている。『論考』では世界を記述することが問題にされた。『哲学研究』では言語の記述が問題になるのである。メルロ＝ポンティは現象学の課題を、私の世界経験を説明したり、分析することではなく、記述することであるとした²⁰⁾。敢えてこの方法と類比していうと、ウイトゲンシュタインの方法は、言語を説明することではなく、記述することに求められる。その意味では、ウイトゲンシュタインの『哲学研究』は、言語について高次の「現象学」を推し進めた労作とみることもできるだろう。

言語シュピールにつき、「わたしはまた、言語と言語の織り込まれた諸活動との総体をも言語シュピールと呼ぶ」²⁵⁾ (p. 20)という定義もなされる。ここからわかるように、「言語シュピール」の外延は大変広く、言語活動の総体を指し示した術語とみることができる。それゆえ、『哲学研究』は言語シュピールの総体を記述しようとする大胆な試みといえる。

『論考』²³⁾の冒頭の言葉を再び引用する。

「世界はファル (Fall) であるものすべてである」

『哲学探究』では実に様々な言語使用、つまり実際のものから仮定の、ないし潜在的な言語など用例が挙げられ議論が進む。それは、できる限り多くの言語のファル (用例) の記述をする作業にほかならない。そこで、誤解をおそれずに敢えていうと、『哲学探究』においては「世界はファル (Fall) であるものすべてである」という考え方そのものは存続し、これは「言語世界はファル (Fall) であるものすべてである」と翻案され、言語の記述であると理解できる。そして、日常言語の記述に焦点が当てられていることからして、実はこの作業は人間の世界の記述であると理解することも可能である。この点では、『論考』と『哲学探究』は連続性をもち、『哲学探究』は哲学的見地から『論考』を発展させたものといえる。

このことをよく示す『哲学探究』第2部の記述を引用してみる。

「どのようにしてひとはこれまでに『わたくしが……は信じる』といった表現をいつから慣用するようになったのか。……(中略)……自分自身と他人を観察し、それで信じるということを見つけたのか」と述べて「わたくしは信じる」という表現のさまざまな用例をあげて緻密な論述がなされる²⁴⁾(p. 376)。

「わたしは雨がふるだろうと信じている」という言明には「雨がふるだろう」というのと似た意義、すなわち似た適用があるけれども、しかし、「わたしはあゝとき雨がふるだろうと信じた」には「あゝとき雨がふった」というのに似た意義ないし慣用がないことになる」(p. 376)。

「でも(わたくしは信じた)というのは、現在(わたしが信じている)ことをまさしく過去に言っているのではなくてはならない!」

そのほか「わたくしは信じる」という発話に関し、「わたしは信じているように見える」(p. 380)「わたしのエゴがそう信じているように見

えるけれども、それはそうではない」(p. 381)などの用例など多数が挙げられる。

この作業の意義に関し、次のような要を得た指摘がある。

「『わたくしが……は信じていると仮定すれば』という言葉の中に、あなたはすでに『信ずる』という語の全文法、あなたの通曉している通常の慣用を前提している」(p. 381)

例えば「わたくしが、雨が降るだろうと信じている」と発話するとき、この発話には「『信ずる』という語の全文法」が付随しているという見解はなかなかの創見ではないか。ウイトゲンシュタインは「信じる」の動詞活用をして、「信じる」という言語行為の多くのアスペクトを記述する。しかも、人が話すとき、潜在的には種々のアスペクトが同時に前提されている。

そのアスペクトの中には、偽りの発話(この例では「信じていると偽って言う」もある。彼はこの問題を何度も取り上げ議論している。我々の立場からすれば、言語行為は構造的に虚偽性を内に含むという事態である。ウイトゲンシュタインの言語理解を知る上でこれは重要な論点で、稿をあらためて論じたい。さしあたり、無意識はたえず偽装をしているという精神分析の洞察に近づいていることを指摘しておきたい。

フロイトは妄想の発生機制を解明する際、「私はひとりの男性を愛している」という命題から出発して、「彼が私を憎む」、あるいは「私は彼を愛していない、愛しているのは彼だ」と動詞および主語(目的)の変換をして論じた⁷⁾。ウイトゲンシュタインの記述の仕方は、命題の文法的活用という点で共通するところがある。しかし彼の場合、人間の欲望の次元を考慮に入れることは全くせずに、ひたすら中立的に人の発話には文の全活用、全文法が付帯している布置があるとみる。そうした言語の記述は、彼にとり、とりもなおさず世界、とりわけ人間の世界のファル (Fall) の記述につながるとみることができるのではないだろうか。

3. 機械 (Machine) としての言語

言語活動の総体を、その運動も顧慮して機械とみる魅力的な見方も提示されている。

「諸活動の仕方としての機械 (Machine)。機械は…… (中略) ……その活動のしかたをすでにみずからのうちに備えているように見える」²⁵⁾ (p. 156)

「しかし、機械はまた別様に運動することもできることを考えてみれば、シンボルとしての機械のうちに、その運動の種類が現実の機械よりもはるかに決定された形で含まれていなくてはならないように見える」 (p. 157)

ひとつの言語表現が様々なその活用形を共に合わせ持っていることをふまえ、言語を機械に擬える。一般に機械は多数の部品が組み合わさって、歯車のようなものを介して連動して、ある特定の課題を達成する。言語もそうした精巧な機械だということである。この言語機械は運動をして創造的な表現をする力をもっていることも指摘する。後期ウイトゲンシュタインの鍵言葉である言語シュピールは、自動的に言語活動をする機械のモデルによって構想されているのである。

この見方は、フロイトの精神分析に触発されて、無意識が言語によって構造化されているとみて、人間の思考が言語機械によって駆動されていることを主張するポストモダンの思想を先取りするものといえる。人が考えるとき、言語が先行しているとする構造論の見方を先取りして明確に示す次のような断章もある。

「わたくしが言語で考えているとき、言語表現と並んでさらに〈意味〉がわたくしの念頭に浮かんでいるのではない。言語そのものが思考の乗り物である」²⁶⁾ (p. 212)

言語が一次的で、思考は言語を乗り物にしているという視点はウイトゲンシュタインが何度も強調している。

ウイトゲンシュタインが、うさぎの頭ともあひるの頭ともいづれにも見て取れる反転図を例にもちだし、この種の2つのアスペクトのうち

1つしか見えない人がいるとし、アスペクト盲と呼んだことはよく知られている²⁵⁾ (p. 385-480)。精神医学の見地から、アスペルガー障碍のためまさにウイトゲンシュタインがアスペクト盲だったゆえにこそ、このような論述がなされたとする見解を聞いたことがある。これは大きな誤解だと思う。

筆者からすると、ウイトゲンシュタインがアスペクト盲の術語によって、知覚レベルのアスペクト盲を例にとりながら、思考や言語についてどのようにみるのかという「風景相」を問題にし、伝統的哲学の見方に凝り固まった人たちのことを痛烈に批判しようとしたように思える。例えば、今の断章で指摘されていることがわからず、言語は思考の付属物であり、思考が根源的であるとしか考えず、逆に言語こそ根源的で、思考は言語から派生していると考えない態度がアスペクト盲とみなされるのである。

それはともかく興味深いことに、言語機械が運動する、つまり言語が新たに創造的な表現をする事象につき、それを付言的な仕方のごく短く、「神秘的」とウイトゲンシュタインがとらえている個所がある。

「それらの運動がもともと——ある神秘的な意味において——すでに現存していなくてはならないように見えてしまう」²⁶⁾ (p. 157)

「ではどのようなときに、ひとは、機械がその可能な運動を既に何らかの神秘的なしかたでそれ自体のうちにもっている、と考えるのか——そう、哲学するときだ」²⁶⁾ (p. 157)

ウイトゲンシュタインは哲学者として言語を徹底して考えぬき、言語機械が存在することを、また言語機械が運動する備えをもっているという認識に達する。最終的にそれは言語そのものが主体的に行為するという事象に帰着する。この言語自体の行為に、彼は、もはや「語る」ことができず「示す」ことしかできない「神秘的」な感情を抱いたことが想像される。言語が多義的な意味作用をする機械であることは説明できない「原現象」である。人は機械の構成を備える言語を、言葉によって基礎づけることはでき

ない。言語のメタ言語はないのであり、そこに言語の限界点がある。

『論考』後半部で、言語の限界におつかり「神秘」があるといわれた経緯と似ており、自動性をもつ精巧な機械の在り方をする原現象としての言語の存在は神秘である。つまり、「世界があるということが神秘的なのだ」²³⁾ (六・四四)とすれば、「言語シュビールがあることが神秘的なのだ」といえる。ウイトゲンシュタインは言語シュビールを目の前にして、宗教的感情はともかく、少なくとも神秘の感情を抱いたことはありうることだと思う。いずれにせよ我々の立場からすると、『哲学的研究』の深い思索の場面で、審美的・宗教的境地が垣間見られる。

V 宗教的見地

1. 哲学的思索に裏打ちされる宗教的見地：倫理的要請

『哲学探究』の執筆をしているときにも、ウイトゲンシュタインは日記などで宗教的なことらについての思索も進めている。例えば『哲学探究』の第2部の準備にとりかかっているとされる時期にあたる1946年には、以下のように記している。

「思うにキリスト教は、なかんずくこう言っている。よい教えというものは皆役立たない。人は生活を変えねばならないのである(或いは、人は生活の方向を変えねばならないのである)。

キリスト教はこう言っているのである。知恵はすべて冷たい。人は鉄を冷たいまま鍛えることが出来ないように、知恵でもって生活を正すことは出来ない」

「キリスト教においては、人は何かに捉えられ、向きを変えられねばならないのである²⁴⁾ (p. 53)

「生活を変えねばならない、生活の方向をかえねばならない」という倫理的な要請が、聖書の言葉をひもとき、キリスト教の教えに基づき真摯に語られる。ウイトゲンシュタインにとり「冷たい知恵」は、自身が批判する科学、また伝統的哲学の知などが念頭に置かれているのだら

う。彼は『論考』の考察を進めるなかで「語り得ぬもの」「思考不可能なもの」が主題化され「世界を正しくみるのだ」(六・五四)「語り得ぬものについては、人は沈黙しなければならない」²⁵⁾と説いたことは述べた。

そうすると、『論考』から『哲学探究』などに至る一連の哲学的思索と並び、同時に宗教的見地のもとに敬虔な思索が続けられていたことがわかる。その際「生の様式」を変えるという倫理的な要請が一貫して説かれている。望ましい生の様式がどのようなものかについて、具体的には明かされていないように思う。彼の論述の流れをふまえば、科学の方法論では不問に付されてしまった「〈魂〉への配慮」¹¹⁾を怠ることなく、生の意味を考える生活という理解で間違いないだろう。

イタリアの碩学アガンベンは、著作『いと高き貧しさ』のなかで、11世紀から12世紀にかけカトリック修道院(フランシスコ会)で修道師たちが一緒に毎日規則正しく祈りを行い、つましい毎日を送る生活を「生の形式」(formavice)と呼んだことを述べている²⁾。それは、キリストの生にならうことを目指した清貧と祈りの生き方である。勝手な連想を許していただくと、もしかしたら、ウイトゲンシュタインのいう「生の形式」という術語は、修道院で定式化された「生の様式」に着想を得ているのかもしれない。ウイトゲンシュタイン自身についていえば、あるときは修道院に入ることや司祭になることさえ真剣に考え、生涯の多くはさながら修道僧のような日々であった点からして、自分に課そうとした「生の形式」は、厳しい規律をもつ修道院の「いと高き貧しさ」の生活だったかもしれない。

哲学的思索に打ち込むことにつき、彼に疑問が生じることがしばしばあったようである。その意義は宗教的見地から答えが与えられる。

「私がしている仕事には、そもそも、やるだけの価値があるのであろうか? もちろんある。ただしそれは、上からの光を受けている限りにおいて、である」

「もし上からの光が存在しないならば、私はただ単に器用な人間であるに過ぎないのである」²⁸⁾ (pp. 57-58)

「上からの光」とは神からの支え、聖書の教えということを目指す。聖書は彼にとり生きていく意義を与え、哲学的思索に潤いを与えてくれるものとしてある。

死の2年前、弟子ドゥルーリーに自分の仕事の意義を次のような印象的な言葉で語っている。

「バッハは彼の「パイプオルガン小曲集」の巻頭ページに「至高なる神の栄光のために、そして、私の隣人のためになるように」と書いた。これこそ私が私の仕事に言いたかったことである」²⁸⁾ (pp. 181-182)。

自分の哲学の書は、すべて神および隣人を宛名にして書かれたというウイトゲンシュタインの言葉は、——やや言い過ぎの観をぬぐえないではないが——高邁な精神を思わせる。神への感謝の祈りと、同時代人には「生の形式」を変えなければならないというメッセージが込められているのである。その意味で、彼の著作は倫理の書でもある。『論考』と『哲学探究』いずれも、宗教的見地が後ろ盾になって書かれ、哲学的思索はいつも宗教的洞察に接近していく構成になっているように思う。そういった点でも、正統な哲学の根幹を揺るがす2つの哲学書は同じ問題意識が貫かれている。彼は第一次世界大戦の最前線で宗教的な目覚めをして以来、亡くなるまで宗教的見地がずっと堅持され、これが彼の哲学と同時並行的に深められていくのである。

2. 聖書の解釈

ウイトゲンシュタインは戦争体験以来、生涯にわたり哲学的思索の傍ら、聖書を熟読し、「本当のキリスト教の信仰をまだ私は全く理解していない」²⁹⁾ (1937年2月20日, p. 130), と謙虚に認めながら、宗教的な思索をめぐらす。ウイトゲンシュタインによるキリスト教の理解は、これまた簡潔でいて卓越している。

例えば、聖書で語られるイエスの奇跡（例えばカナの結婚式の奇跡（ヨハネによる福音書第2章）を次のように理解される。

奇跡は「尋常でないことでも、現に生じた出来事でもなく、そうした出来事がなされた精神、水の葡萄酒への変化が（いわば）それを示すジェスチャーに過ぎないような何かなのである。もちろんそれは、こうした尋常でないことをなす者のみが示しうるジェスチャーである」²⁹⁾ (1931年5月6日, pp. 65-66, 下線著者)

「示す」という言葉は、『論考』で「語りえぬもの」について人は示すしかないと言われた「示す」という言葉と同じ用法ではないかと思われる。奇跡は、「語り得ぬもの」「思考不可能なもの」を示す振舞いである。しかも、尋常でないことをなす特別な者、つまりキリストしか示せない。

「奇跡とは、それを奇跡的な精神でなす者がなした奇跡的な精神なのである」

「奇跡的な精神がなければ、それは単なる奇妙な事実であるに過ぎない」²⁹⁾ (1931年5月6日, p. 66)

この断章で興味深いのは、奇跡の成立条件が明確にされていることである。「こうした尋常でないことをなす者のみが示しうるジェスチャーである」という表現のなかの「示す」という言葉は、『論考』で「語りえぬもの」について人は示すしかないと言われた「示す」という言葉と同じ用法ではないかと思われる。奇跡は、「語り得ぬもの」「思考不可能なもの」を示す所作である。しかも、尋常でないことをなす特別な者、つまりイエスしか示せない。

奇跡を起こすイエスは、尋常ではないことをなす奇跡的な精神 (Geist) の持ち主とみなされる。そして奇跡はイエスによる象徴的な所作にほかならず、イエスの奇跡的な精神があって初めて奇跡になる。さらに、「そんな奇跡を感じるために、私は全体を本当に正しい精神で読まなければならない」²⁹⁾ (1931年5月6日, p. 66) と、奇跡と受け取る人の条件として、正し

い精神 (Geist) をもっていることが挙げられる。

奇跡は、言語の限界点で起こる出来事で、精神の次元で生じる事象とみなされ、奇跡的な精神によって初めて「精神」の所作からなる高い強度性を帯びた例外的な出来事が語られるとみる。そこには、聖書の奇跡の物語を、「精神」についての使徒による記述とみる視点がうかがえる。その際、精神 (Geist) の術語は心 (Seele) とは区別される宗教的感情を喚起する次元を指し示す術語として使用されていると考えられる。まさに高次の「魂への配慮」がここに見て取れる。

高次の感性をもつワイトゲンシュタインは、音楽に精神の所作を聞く。

「ベートーヴェンは全くのリアリストだ。彼の音楽はまったく真理だ、と私は言っているのだ。私はこう言いたいのだ。彼は人生をまったくそのあるがままに見て、それからそれを高めるのだ。それは全くの宗教である。…… (中略) ……ベートーヴェンは本当の痛みにおいて「苦しんでいる人を」慰めるのである」²⁰⁾ (1931年3月1日, p.59)

既に述べたように、彼はベートーヴェンだけでなく、バッハの音楽にも、精神の所作、ひいては宗教をみる。

ワイトゲンシュタインにとって、宗教は教義でも理論でもなく祈りの行為である。同様に、芸術は祈りの行為である。宗教や芸術にこうした行為のベクトルを重視する論点は大いに共感できる場所である。付け加えると後期ワイトゲンシュタインからすれば、聖書の物語も言語シュピールの所産である。音楽、芸術も同様である。

3. 個人的な内密の問題 罪悪感・告白強迫

ワイトゲンシュタインにあって、宗教は様々な局面で要請されてくる。これまで、哲学の思索のなかで宗教の次元を論じた。もう1つ忘れてならないのは、彼の場合、極めて逸脱の多いパーソナリティに関連した個人的な問題が宗教のほうへと傾斜させる動因になっている事実である。宗教の役割に関する次の言葉は、自分の

ことをまずもって述べたものとみて間違いない。

「キリスト教という宗教は、無限の助けを必要とする人、言うなれば無限の苦しみを感じている人のためにのみ存在するのである」

「キリスト教の信仰は——私は思うのだが——このような最大の苦しみの避難所である」²¹⁾ (p.46)

無限の苦しみを感じている人、無限の助けを必要とする人にこそキリスト教が必要であるという言葉は、やや誇張があるようにも感じないではないが、彼の切迫した病的状態から発せられたものと受け取るなら理解できるだろう。このとき、治療薬は聖書の言葉を求められる。

「このような苦しみのなかで、心を閉ざす代わりに心を開くということが出来た人は、心に治療薬を受け入れたのである」²²⁾ (p.46)

— 苦しみとしてまず挙げられるのは、彼をむしろ発作的に強くなる自殺衝動であろう。これが、戦争体験によって多少とも改善したことを述べた。最終的には、「宗教的信仰がその唯一の矯正法」²¹⁾ (p.201) であると彼は述べており、宗教が自殺衝動を防止する留め金となったことが考えられる。

彼はこうも述べる。

「人は不完全であると信じるよりは、病気であると信じる程度に応じて、より宗教的なのである」²²⁾ (p.45)

宗教的になる理由が「病気である」というこの言葉には、彼が自分の状態を病気と自覚していたことを示す。戦争中、自慰行為をしてしまうことに彼は強い罪悪感を表明していた。この現象は、キリスト教の教育を受けたヨーロッパの青年によく認められたことで、別に彼に特別なことではない。しかし彼の場合、その罪悪感は普通の青年より強く、その分彼に少なくとも潜在的には篤い信仰があったことが考えられ

る。自慰も、自殺衝動とならび病気とみなしていたことも考えられる。

嘘をつくことに彼は強い罪悪感を抱き、強い苦悩に陥った。これも彼に既に多少とも信仰があることに由来するだろうが、この苦悩も病気に数えられえらるだろう。

時々、彼は思い出したように親しい人に自分が犯した罪を告白せずにはいられなくなる。この告白強迫のエピソードがいくつか記録されている。

1931年ノルウェーの例の小屋で過ごした折、自分の恥ずべきことを思い出し、告白を記した。ケンブリッジに戻って来て、彼はドゥルーリーに、またムーアに読むよう強く頼んだ¹⁹⁾ (pp. 18-19)

さらに1937年、突然ロシア語の個人教授パスカル夫人に電話をして、「緊急に会わなければならない」と告げ、会いに行き、「私は告白するために来ました」という。最大の告白の内容は、1922年秋から1924年夏までオーストリアの小さな村での小学校教師をしていたとき、嘘をついたことであつた¹⁹⁾ (p. 23)。

彼は教室で生徒の出来が悪いので平手で打つたところ、鼻血が出た。校長からその事実について問い正され、「自分はそんなことはしていない」と否認したのだった。村で大騒ぎとなり、裁判にもなった「ハイドバウアー事件」である。なおBartleyの報告によると、彼の先進的な教育に対し村の人は強く反発していて、そういう背景のもと生徒がわざと鼻血が出るように仕組んで、騒ぎが大きくなったという³⁾。彼は以後この虚偽行為についてずっと気にしていた。ドゥルーリーやムーアに読んでもらおうとした告白も、この事件にまつわる嘘であることが考えられる。

この告白の行為は、精神医学からすると告白強迫と呼んでよいものだと思う。いずれにせよ、罪責に苦しむウイトゲンシュタインの最終的な拠り所は宗教に求められるのである。

VI パーソナリティ・気質

ウイトゲンシュタインは自分の性格、才能等について自分で日記などに書いており、卓越した洞察をしている部分が多い。自ら語っていることを少し引用しよう。

1. 「飛びぬけて複雑で繊細な造りをした思考装置」

「私は大部分の人間よりもむき出しの魂を持っている。私の天才とはいわば、そこにあるのだ」²⁹⁾ (1932年1月28日, p. 98)

この言葉は43歳時のもので、時期的に『論考』を完成させケンブリッジにいるときに書かれている。自分にきわめつきの繊細な感性、高い知性が備わっていることを認めているものである。

「私の思考装置は飛びぬけて複雑で繊細な造りであり、そのため普通より敏感なものだと思う」

「もっと粗い仕組みなら妨害しないような多くのことが、この装置の働きを妨害し、活動できなくする。小さな塵が精巧な器具を止めても、もっと大造りな器具には影響を与えないように」²⁹⁾ (1930年10月16日, p. 47)

この言葉から、彼の天才は、きわめつきの繊細な感性ときわめつきの高い知性をそなえていることからなることがわかる。あわせて、「飛びぬけて複雑で繊細な造り」ゆえに、他人の存在や話、周囲の物音に非常に敏感になること、またそのため、自分の思考装置が働かなくなることも書かれている。つまり、人の多い雑踏などでは疲れやすく集中力が下がる。逆に、人里離れたところだと、住みやすく才能を発揮できる。これは彼がノルウェーの村に時々行き、思索を深めたことを思い起こせば、合点がいくところである。

自分の才能を表現するのに使用された「思考装置」「器具」といった表現は、言語を機械とみる考え方に通じる。各人に固有な言語器械を想定できるはずである。そうすると、ウイトゲン

シュタインの言語器械は非常に精巧につくられていると考えられる。

2. 統合失調病質（分裂病質）の存在態勢

ウィトゲンシュタインは「他の人」と違って、自分には「精神」の次元が生きるのにふさわしい場であることも自覚している。

「私がより精神的な次元に赴く場合、その次元においては自分で人間であることができる。そこでは私は正しいのである」

「これに対して、他の人間たちはそれほど精神的ではない次元においても人間であることができるのだ」

「まさに私は建物のその階に彼らのような権利もっていないのだ。そして彼らの次元においては、そして彼らの次元においては、正当にも自分に劣等感を感じるのである」²⁹⁾ (1931年5月6日, p.67)

ここで彼は、実に的確に普通の健全な人々の住処となる「世俗的な共同社会」と、高次な哲学的思索や宗教的思索の場となる「精神の世界」を区別し、普通の人々は世俗的な共同社会において「人間となることができる」とは対照的に、自分は精神の世界において初めて「人間となることができる」と述べる。世俗的共同社会では異邦人で生きづらく、劣等感をもたざるをえない。ここにいるとき、疎隔感や異邦人である感覚も生じる。ところが、精神の次元に赴くと、「自分の思考（哲学的思考）に対する喜びとは、私自身の奇妙な生に対する喜びである。これは生きる喜びなのか」²⁹⁾ (1931年10月24日, p.80) という言葉からわかるように、生きる喜びが体験される。

この洞察は正常性を相対化する視点を提示しており、精神医学にとって貴重である。

そこから彼の生きる戦略が定式化される。

「私はもっと希薄な大気の中で生きなければならない。そこに属しているのだ。そして、もっと濃い気圏で生きようと望むのを許された他の人々と共に生きようという誘惑に属してはいけない」²⁹⁾ (1931年5月6日, p.68)

彼は世俗的共同社会でたくましい健全人と共に生きる誘惑さえ拒絶し、精神の次元での孤高の生を選択する

要するに、ウィトゲンシュタインはきわめつきの精巧な言語器械ゆえに生来、俗世間に生理的といつてよい違和感をもち、天上の世界に親和性をもつ。彼自身が語る繊細な思考装置の在り方、生き方はクレッチマーにより提起され、現象学・人間学的精神病理学の立場から掘り下げられた統合失調病質（分裂病質）の存在態勢にほかならない¹⁴⁾。この事例は古典的な統合失調病質に入ると考えられる。

「くだらないことほどに私が恐れているものはなく、くだらないことほど私が無条件に避けたいと思うものはない」

「私にはこれが……（中略）……一つの臆病さである」²⁹⁾ (1931年3月2日, p.60)

「私は並はずれて臆病であり、戦場で臆病者が振る舞うように人生で振る舞っている」²⁹⁾ (1931年11月2日, p.84)

彼が最も苦手とする「くだらないこと」の端的な例は、井戸端会議といった日常生活の中で人々が笑いながら他人の噂に興じるどうでもいいお喋りだろう。日常的な交流が彼には怖いため、ひどく臆病になり、自分に閉じこもってしまうことも認める。

臆病の半面で、自分には虚栄心と厚かましきがあることも認める。

「ここで私は自分の虚栄心の最後の根底（最深部、のことを言っているの）をまったく暴露していない」²⁹⁾ (1931年5月6日, p.68)

「私の中には絶ち難い厚かましきが生息している。どんな惨めな状態に置かれても、いつも自分を著名な人と比べたがるのだ」²⁹⁾ (1937年2月13日, p.117)

確かに統合失調病質の人は臆病でありながら、内面では高いプライドをもち、打たれ強い。臆病さ（不安）と強靭さ（貴族意識、美意識）の同居は、ウィトゲンシュタインにもあてはまるのである。

また彼には強い対人希求があり、何でも話ができ心を許せる親しい友人もいた。また、懇切丁寧に弟子を育てた。彼が親しくなる人物は、彼に似た寡黙で考え深い性格の持ち主が多かったという。精神の次元を解す人物となら、深い感情的交流をしたのである。こうした対人関係のありようも統合失調病質（ないし失調失調気質）に特徴的である。彼が同性愛者だったことと統合失調病質の関係は本論ではおいておく。

現象学的精神病理学の観点から述べておきたい。木村敏は統合失調圏の人に特徴的な時間様態としてアンティフェストムという概念を提唱した¹³⁾。ワイトゲンシュタインの生き方にこの在り方がよくあてはまるように思う。唐突な先走った戦争参加の仕方がよい例である。

日記に記された「8日もしたら、われわれは砲撃陣地へ行く。どうか、困難な課題の中で自分の生を危険にさらす機会が僕に与えられますように」⁹⁾ (1916年4月16日, p.109) というくだりにみてとれる切迫感を自ら呼び込むような振舞いに、アンティフェストムの時間様態がよく示されている。

戦争参加は、統合失調症の発症前の在り方として笠原嘉が提唱した「出立」³⁰⁾の性格をもった行動ともとれる。しかし、ワイトゲンシュタインは顕在発症することはない。穿ってみれば、挿間的に強く出現する自殺衝動や告白強迫などは、微小精神病 (micro psychosis) であった可能性も否定できない。彼の場合、何といても高い言語能力と宗教が健在発症を防止する留め金になったことが考えられる。

彼の哲学の問題の立て方は「世界はファルであるもののすべてである」といった定義がよい例だが、世界をまるごと一気に理解しようとする特徴がある。術語では「すべて」《alles》「全体」(Ganze) といった言葉が多い。そうした面も統合失調病質（ないし統合失調気質）に特徴的であるように思う。

中井と飯田は、ワイトゲンシュタインのパーソナリティにつき生涯の生き方や哲学論の特徴などをふまえ、古典的な統合失調病質とする見解を出している⁸⁾。さしあたり、筆者の見方も

この考えにそったものである¹⁰⁾。

精神医学において、第一次世界大戦は戦争神経症（戦争ヒステリー）の大量出現でよく知られている。ワイトゲンシュタインはこのような神経症、あるいはPTSDとはおよそ無縁であった。彼はウィーン生まれの女性マルガリートと交際し、生涯で「ただ一人愛した」この女性と結婚まで考えるが、一方的なぎくしゃくした不自然な愛の表出の仕方をして、実をむすばない。そうした異性関係の在り方からしても、構造論的精神分析の立場からみると、彼のパーソナリティは「神経症構造」でも「倒錯構造」でもおよそなく、「精神病構造」に属することは間違いないだろう。ワイトゲンシュタインにとって、宗教また哲学のエクリチュールは狂気とすれすれの危うい精神病構造に基礎をもちつつ、これを補填する役割を果たしたと考えられる。

Ⅶ おわりに

精神医学の側から天才人をとらえる 物差しの創出

ワイトゲンシュタインの幼年時代の写真を見ると、大きく見開いた目をして、しっかりした眼差しで前方をしっかり見据えており、実に賢そうな表情をしている²¹⁾ (p.113)。そこには、ただならない緊張感をたたえているようにも思える。きわめつきの高い知性ときわめつきの高い感性を生来そなえていることを窺わせる写真である。ワイトゲンシュタインは、4歳になるまで言葉を話すことができず、その後吃音があったという。一般に生来高い知性と感性をそなえた人は考え深く、この世に誕生して世俗社会に適応するのに著しく大きな課題をかかえていることは十分考えられるところである。言葉を学ぶ場面でもそうで、乳幼児期に言葉の「発達」が遅れ、吃音を呈する天才人は少なくないように思う。

DSM 精神医学の時代に入り、自閉症を専門とする医師フィッツジェラルドが代表的だが、事例ワイトゲンシュタインをアスペルガー症候群、ないし自閉スペクトラム障碍とみる向きが

目立つ⁴⁾。この種の概念は特異なパーソナリティが、認知機能の障碍に帰せられ、創造性の機制も射程に入れる豊かな人間学的内実に全く配慮がなされないで、事例ウイトゲンシュタインには不適切であると考え。もしこの概念でこの哲学者の難解を極め、一見理解不可能と思われる思想が説明できると主張するなら、それは精神医学の暴力的な越権であるのではないだろうか。認知機能についていえば、障碍というより認知スタイルの質が違くと質の多様性を大切にする視点が必要だと考える。

ウイトゲンシュタインのような事例をふまえると、精神医学は、生来、高い知性と感性の双方を兼ね備えた傑出人については、最初に出会う世界との「原初的不調和」が質、量において著しいことも考慮に入れ、彼（彼女）らに特化したカテゴリーを考えることも一案だと思う。クレッチマーは、天才人に焦点を当てて『天才の心理学』¹⁵⁾を著した。そこでは、乳幼児期における世界との出会いにまでさかのぼった踏み込んだ考察はない。成長途上での創造力なども視野に入れたあらたな物差しを創出する時期にきているように思う。

文 献

- 1) Agamben, G. (岡田温司, 栗原俊秀訳) : 裸性. 平凡社, 東京, 2012.
- 2) Agamben, G. (上村忠男, 太田綾子訳) : いと高き貧しさ——修道院規則と生の形式. みすず書房, 東京, pp.124-144, 2014.
- 3) Bartley, W. W. (小河原誠訳) : ウイトゲンシュタインと同性愛. 未来社, 東京, pp.133-149, 1990.
- 4) Fitzgerald, M. (石坂好樹, 花島綾子ほか訳) : アスペルガー症候群の天才たち——自閉症と創造性. 星和書店, 東京, 2008.
- 5) Freud, S. (新宮一成訳) : 夢解釈 (1900) I・II. フロイト全集4・5. 岩波書店, 東京, 2007, 2011.
- 6) Freud, S. (中岡成文訳) : 機知——その無意識との関係 (1905). フロイト全集8. 岩波書店, 東京, pp.12-20, 2008.
- 7) Freud, S. (渡辺哲夫訳) : 自伝的に記述されたパラノイアの1症例に関する精神分析的考察シュレーバー (1903). フロイト全集11. 岩波書店, 東京, pp.160-168, 2009.
- 8) 飯田真, 中井久夫 : 天才の精神病理——科学的創造の秘密. 中央公論社, 東京, pp.125-156, 1972.
- 9) 笠原嘉 : 内因性精神病の発病に直接前駆する「心的要因」について. 精神医学, 9 : 403-412, 1967.
- 10) 加藤敏 : 統合失調症の語りと傾聴——EBMからNBMへ. 金剛出版, 東京, 2005.
- 11) 加藤敏 : 現代社会における精神病構造と倫理的負債, 生け贄 (サクリファイス)——3.11をふまえて. 臨床精神病理, 33 : 219-232, 2012.
- 12) 加藤敏 : ジャック・ラカンにおける精神分析とカトリシズム・宗教. 病跡誌, 83 : 4-22, 2012.
- 13) 木村敏 : 自己・あいだ・時間——現象学的精神病理学. 弘文堂, 東京, 1981. / 筑摩書房, 東京, 2006.
- 14) Kretschmer, E. : Körperbau und Charakter. Springer-Verlag, Berlin, 1955. (相場均訳 : 体格と性格——体質の問題および気質の学説によせる研究. 文光堂, 東京, pp.184-228, 1960.)
- 15) Kretschmer, E. (内村祐之訳) : 天才の心理学 (1958). 岩波書店, 東京, 1982.
- 16) 黒崎宏 : ウイトゲンシュタインの生涯. ウイトゲンシュタイン全集1 別冊付録. 大修館書店, 東京, p. 6, 1975.
- 17) Lacan, J. : Le Séminaire (1974-75), Livre XXII, RSI. 1974/12/17.
- 18) Lacan, J. : Le Séminaire (1975-76), Livre XXIII, Le sinthome. Seuil, Paris, 1999.
- 19) Malcolm, R. (黒崎宏訳) : ウイトゲンシュタインと宗教. 法政大学出版局, 東京, p.21, 1998.
- 20) Merleau-Ponty, M. (竹内芳郎, 小木貞孝訳) : 知覚の現象学1. みすず書房, 東京, p. 3, 1967.
- 21) Monk, R. (岡田雅勝訳) : ウイトゲンシュタイン1, 2——天才の責務. みすず書房, 東京, 1994.
- 22) Rhees, R. : Ludwig Wittgenstein : Personal Recollections. Rowman & Littlefield, Maryland, 1981.
- 23) Wittgenstein, L. : Tractatus logico-philosophicus : Logisch- philosophische Abhandlung (edition suhrkamp). Suhrkamp Verlag, Frankfurt a. M., 1963. (藤本隆志, 坂井秀寿訳 : 論理哲学論考. 法政大学出版局, 東京, 1968. / 奥雅博訳 : 論理哲学論考. ウイトゲンシュタイン全集1. 大修館書店, 東京, pp.1-122, 1975 / 野矢茂樹訳 : 論理哲学論考. 岩波書店, 東京, 2003.)
- 24) Wittgenstein, L. (奥雅博訳) : 草稿1914-1916. ウイトゲンシュタイン全集1. 大修館書店, 東京,

- pp. 123-337, 1975.
- 25) Wittgenstein, L.: *Philosophische Untersuchungen*. Suhrkamp Verlag, Frankfurt a. M., 2003. (藤本隆志訳: 哲学探究. ウィトゲンシュタイン全集 8. 大修館書店, 東京, 1976.)
- 26) Wittgenstein, L. (藤本隆志訳): フロイトについての会話. ウィトゲンシュタイン全集 10. 大修館書店, 東京, pp. 201-224, p. 221, 1977.
- 27) Wittgenstein, L. (藤本隆志訳): 美学についての講義. ウィトゲンシュタイン全集 10. 大修館書店, 東京, p. 163, 1977.
- 28) Wittgenstein, L.: *Vermischte Bemerkungen. Eine Auswahl aus dem Nachlaß* (Wright, G. H. von, Hg.). Suhrkamp, Frankfurt a. M., 1978.
- 29) Wittgenstein, L. (鬼界彰夫訳): ウィトゲンシュタイン哲学宗教日記 1930-1932/1936-1937. 講談社, 東京, 2005.
- 30) Wittgenstein, L. (丸山空大, 早川啓慈, 石神郁馬訳): ウィトゲンシュタイン『秘密の日記』——第一次世界大戦と『論理哲学論考』. 春秋社, 東京, 2016.

JAPANESE BULLETIN OF PATHOGRAPHY
日本病跡学雑誌

No.92
2016

